

BLな小話 カツサンドラ



招木かざ

野崎が怪我をした。

クラスの連中は、日比谷に話しかけられたからだ、と言っている。

日比谷の噂は聞いたことがある。

曰く――死神。話しかけられたら、三日以内に不幸が訪れる。

噂を初めて聞いたとき、俺、狭山ハジメはアホらしい、と思った。

死神が現実にいるわけないだろ、みんな漫画やアニメに影響受けすぎ、と。

まあ、日比谷の外見は、長く伸ばした前髪と、分厚い眼鏡で陰気な雰囲気、まとわりついている。

死神に見えなくもない。それが、俺の日比谷に対する評価だった。野崎が怪我するまでは。

「おい、ちょっと来てくれ。話がある」

野崎が入院して三日後、俺は日比谷を校舎裏に呼び出した。

「やめとけて、ハジメ」

たまたま、教室にいた阿部が、俺に言う。

「日比谷に関わるのはよせ。シャレになんねーよ。野崎のことで、頭に血が上ってるのかもしれないが……」

「わかってるなら、止めるな」

俺と野崎は仲が良かった。中学時代からの、大切な友人だ。

その友人の怪我に、日比谷が関わっているなら、聞きたいことがある。

日比谷は俺の呼び出しに、おとなしく応じた。

放課後の、日の当たらない校舎裏。爽やかとは言い難い場所で、俺は日比谷に詰め寄った。

「野崎は、日比谷が話しかけたから怪我したって、本当か？」

「……違うよ。ぼくが話しかけなくても、野崎君は怪我をした」

ぼそぼそと、野崎は言葉を紡ぐ。顔は伏せ気味で、俺の顔をまもとに見ようとしない。その陰気な態度に、俺の神経がささくれ立つ。

「……止めようとしたんだ」

「何を？」

「……野崎君が、怪我するのを」

野崎の入院の理由。それは通り魔だった。部活で遅くなって、その帰り道に、ナイフで足を一撃。犯人は未だ逃走中。

「気をつけてって……言ったんだ。ナイフを持った男が、君に忍び寄るのを、夢で見たと」

「なんだそりゃ。まるで、日比谷に未来が見えているみたいじゃないか」

「その通りだって言ったら……どう思う？」

俺は顔をしかめる。

「みんなはぼくを、死神だって言うけれど……そうじゃないよ。ぼくは、カッサンドラだ」

「かさどら？」

「ギリシャ神話の話だよ。カッサンドラという女性は、アポロン神に気に入られて、未来を予知する能力を与えられた。でも、その後アポロン神の怒りをかって、予言が誰にも信じてもらえないようになってしまった……」

俯き加減だった、日比谷がゆっくりと顔をあげた。長い髪と、分厚い眼鏡の隙間から、瞳が見えた。

……人生に疲れ切った、絶望した人間の目。

俺がその目にひるんでいるうちに、日比谷は立ち去った。

「あー、田中？ お前、日比谷と同じ中学だったよな？ あいつって、中学時代から、ああだったの？ その、死神って呼ばれていた？」

その夜、俺は日比谷と中学時代同じ学校だった級友に、電話をかけていた。

そうしてわかったのは、小学校時代の日比谷は明るかったこと。それが、担任教師の事故死を言い当ててしまったことを切っ掛けに、今のような死神と呼ばれる存在になったこと。

「日比谷。あのな」

翌日、俺は日比谷に話しかけていた。

「俺、お前のこと誤解するところだった。お前は、野崎を助けようとしたんだな」

「……」

「死神なんて悪口言われて、それでも、野崎に注意しろって言おうとしていたんだろ」

昨日まで、俺は野崎の怪我にむかついて、何かに八つ当たりしたかった。日比谷はその相手にちょうど良く見えた。

だけど、それはやっちゃいかん行為だ。単なる言いがかりだ。

「狭山、おい！」

物言わぬ日比谷に話しかけていたら、阿部が俺の襟根っこを引っ掴み、教室の端へと移動する。

「何考えてんだ！ 死にたいのか！ 不幸になるぞ」

「死なないよ。怪我もしない」

俺は死なない。だって、日比谷は俺に警告を与えようとしなない。つまり、俺が死んだり怪我をする夢を見ていないということだ。それなら、いくら喋っても大丈夫だ。

こうして俺の、日比谷に一方的に話しかける日々が始まった。

最初のうち、日比谷は俺を戸惑ったように見ていた。

時間が経つにつれて、少しずつ話にのってくれるようになった。

教室の連中も、俺が日比谷と話をしているのに、病気怪我ひとつなくピンピンしているのを見て『日比谷＝死神説』は誤りだったと認識するようになった。

日比谷は少しずつ、周囲の人間と話をするようになっていった。

ある日の朝、教室で、日比谷に話しかけようとして、その顔が真っ青なことに気がついた。

「日比谷、どうした？」

「狭山君……どうしよう。夢を、見た」

「どんな夢だ」

日比谷がこんなに青ざめていることは、誰かが死ぬかまたは怪我する夢か。

「狭山君が、校門の近くを歩いていて……ナイフを持った男に……」

そして、日比谷は泣き出した。

俺も衝撃を受ける。俺がナイフで刺される。

「冗談じゃない……」

俺が死んだら、日比谷はどうなる？

『日比谷＝死神説』の復活だ。第一、俺にはやりたいことがある。

「死んでたまるか」

俺は急いで、身を守る方法を考えた。

「何を、考えているのかな？ 三年一A所属、狭山ハジメ」

「はあ。最近、物騒なので。護身用にと」

「護身用……そのふざけた格好が、護身用」

「護身用です」

校門の入り口で、生徒の制服に乱れがないかチェックしていた生活指導の教師は、登校してきた俺の格好をてっぺんからつま先まで見て、ひきつった笑顔を見せていた。

俺はちゃんと制服を着ている。シャツのボタンは外していないしネクタイもきちんと結んでいる。ただ、その制服の上に、戦国時代の甲冑を身につけていた。

演劇部の衣装係が魂を込めて作った、傑作だ。カーボン樹脂だか、最新の素材を使っているとかで、とことん軽量化されているのに、強度は戦国時代の甲冑をしのぐという。日比谷の予言を聞いた俺は、文化祭で目にしたこの甲冑のことを思い出し、演劇部の連中を拝み倒して貸して貰ったのだ。ナイフ——刃物を防ぐには、やはりそれなりの防具が必要だろう。

「校則には、甲冑着て登校してはいけない、って書いてないですよね？」

「常識で考えろ————！」

没収された。

しかも放課後、生徒指導室に呼び出されて、説教される。

帰ることには、日はとっぴりと暮れていた。

「狭山君。一緒に帰ろう」

生徒指導室から出ると、日比谷が待っていた。

「夢では、校門が見えたんだ。だから、そこを通り過ぎれば……」

日比谷はどこから調達したのか、木刀を持っていた。

「狭山君は、ぼくの大切な人なんだ……」

木刀を構えながら、俺の数歩先を日比谷は歩く。

俺はというと、日比谷に大切に思われている、という事実に感動していた。

「……誰か居る……」

先行していた日比谷が足を止める。

校門の影に、うちの高校ではない制服を着た、十八歳くらいの男が立っていた。

男は俺と日比谷を見つけると、ふらふらとした足取りで近づいてくる。

「オレの彼女を寝取ったのは……お前か？ この高校のヤツだってのは、わかってるんだ……！」

」

男の手が、いや、男が手にしたナイフが光る。

わけのわからない奇声を発しながら、男は日比谷に襲いかかった。

咄嗟に俺は、男と日比谷の間に割ってはいる。

男のナイフが、俺の腹に吸い込まれて――

がきん、とナイフが折れた。

「狭山を傷つけるなー！」

日比谷が男を、木刀で打つ。その騒ぎを聞きつけた教師や、部活帰りの生徒やらがやって来て、男は取り押さえられた。

「狭山君、狭山君怪我は……！」

「大丈夫だよ」

俺はナイフで穴が空いたシャツを脱ぎ捨てた。鉄の輪っかがいくつも組み合わされた、防具が露わになる。

「なに、それ？」

「演劇部の衣装係がつくった、鎖帷子。甲冑の下に身につけるもので、刃物に対する防御力が高いんだとか。凝り性なんだな、演劇部って」

男は、野崎を襲った犯人だった。

犯行理由は、うちの高校の生徒に彼女を奪われたとか言っているらしいが、それで通り魔されたのではたまったもんじゃない。

男に腹を刺されそうになった俺は、一応検査入院した。演劇部の衣装係は、本当にいい仕事をしていた。

衝撃で青あざができてはいたが、血は一滴も流れていない。湿布薬を貼っただけで退院にな

った。

「どうして、狭山君は、ぼくの言葉を信じてくれたんだい？」

退院後、俺はさらに念のために一日、自宅で療養することになった。見舞いにやってきた日比谷は、泣きそうな声で俺に問う。

「……なんでだろうな」

強いて言えば、日比谷がこれ以上悪口を言われるのが、嫌だった。

ふと、気がつく。俺は、日比谷が好きなんだ。

悪口を言われるとわかっていて、それでも不幸が訪れそうなヤツに忠告をしていた日比谷が。無意識に、身体が動く。

それが自然なことであるかのように、俺は日比谷を抱きしめていた。

「さ、狭山君？」

「嫌か？」

耳元で囁くと、日比谷は俺の背中に腕を回してくる。

そして、キスをした。

この一件以来、日比谷を悪く言うヤツは居なくなった。

それどころか、ナイフを持った男と木刀でやりあった勇者として、一目置かれる存在となっている。

それは、まあいいのだが、問題は日比谷にラブレターなるものを、女子が寄越すようになったことだ。

少し前までは陰気だ何だと言っていたくせに、今では寡黙なところがすてき、ときたまもんだ。

「不機嫌そうだね、狭山君」

「別に……」

登校し、机の中に入っていたラブレターを取り出して、カバンにしまいながら、日比谷が言う。

「返事、出さなきゃ」

「OKですってか？」

「逆だよ。断りの返事だよ」

にっこりと、日比谷は笑う。

今では、日比谷の前髪は切られて、眼鏡もレンズの薄い物になっていた。表情がよく見える。

「ぼくの恋人は、目の前にいるからね」

野崎は明日、退院することになっている。

以前、恋人ができれば、紹介するとは約束していたが――驚くかなあ。やっぱり。

BLな小話 カッサンドラ

<http://p.booklog.jp/book/65179>

著者：招木かざ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gotoji/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65179>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65179>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ